

加工用きゅうりの 契約栽培と肥料

東海漬物製造(株)園芸技術研究農場長

富岡 芳雄

はじめに

“加工原料の契約栽培はもうからない”というのが一般通念のようである。業者ペースでことが運ばれ、青果栽培にくらべ収益が少ないからであろう。

しかし年により、季節によって花をさかせたり、トラクターでしき込んだりすることがあるのを考えれば、契約栽培は一概に見すてたものでもなかろう。ことに流通事情のよくない地域では、結構立地する場合があります、現にそのようなところがいくらかもある。

さて、きゅうりの加工といえば醤油漬、味噌漬、粕漬、酢漬など漬物加工が主流をなしている。

そしてその栽培との結びつきとして、一次加工、つまり塩蔵の問題がある。塩蔵施設とその処理能力によって栽培地や栽培面積を決定する必要があり、どこでも栽培できる筋合のものではない。

また、青果栽培地帯で余ったものを塩蔵するという考えがあるが、これは好ましくない。なぜなら、加工品も品質競争の時代であり、屑物は不適合であるのと、青果用品種が必ずしも加工用品種と一致しないからである。

栽培の概要

トマト栽培ではすでに無支柱栽培が普及したが、きゅうりでも用途によっては地這栽培で差支えない。支柱栽培は資材や労力がかかるが、管理や収穫には都合よく増収になる。ことにピックル系のもは支柱栽培にした方がよい。

1. 品 種 漬物原料用品種の特性は増収品種であることその他、① 形状が加工目的に適している。② 塩蔵歩留りがよい。③ 歯切れや肉質がよい、などの点があげられる。

落合系は皮が硬く、3尺系は歩留りが低いなどの欠点がある。四葉系や白イボ系は肉質がよく歯切れもよい。それぞれの用途によって品種を選ぶ

べきである。

ピックル用品種は一般に耐病性が弱い欠点があり、今後の品種改良が待たれる。現在品種ではサカタP-B、みかど試交GY-35M、久留米P-1号などが収量多く形状も整い有望である。

2. 播 種 一般に露地栽培が主体であり、播種時期はその地域の霜害の心配のなくなった頃である。畦立、マルチをしてから所定の位置に2～3粒ずつ播く。増収をねらうならば作期を前進させるために、ポット育苗して定植する。

露地定植はペーパーポット育苗の15日苗を、トンネル定植はポリポット育苗の20日苗を、露地定植より20日くらいさかのぼって定植する。

3. 栽植本数 地這栽培は2mの畦巾に、40～50cm株間で、10aに800～1,000株、支柱栽培では150cm畦に40cmの株間で、10aに1,600株ぐらいが

写真-1 四葉系きゅうり

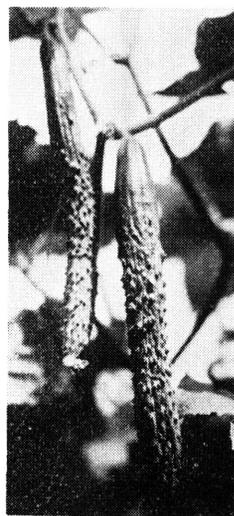


写真-2 生育中のきゅうり



適当である。1株本数は、1本立よりも2本立の方が収量が多くなるので、間引する必要はない。

4. 支柱の組み方 きゅうりを充分生育させ、収量をあげるためには、しっかりした支柱組みが必要である。

表一 支柱の所要資材 (10a当り)

品 目	規 格	数 量
竹	直径3cm, 長さ3m, 2m間隔	360本
(パイプ支柱)	長さ3m, 中央接続, 3m間隔	110セット)
ナイロンネット	巾180cm, 長さ18m	44枚
針 金	14番線	10kg
	16番線	33kg
ポリテープ		5巻
	杭 長さ50cm	30本

材料は手近かに入手できるものを用いるが、パイプ支柱は耐用年数が長く、作業がらくである。所要資材は表一のようなものである。

畦の両端に杭を打ち、支柱の中央部を14線で張り杭に固定する。ネットは上下を16番線に通し、ポリテープで支柱に取りつける。ネットは粗密のムラがないように、均一に伸ばして張る。

5. 管 理 摘芯については品

種の節成性を考慮に入れる。一般に節成性の高いものは摘芯の必要はなく、節成性20%以下のものは摘芯により若干増収する。主枝と側枝の節成性は、後者がやや高い場合が多く、節成性の高い側枝を出させ、多くならせようとするわけである。そして10a当りの蔓数を4,500~5,000本とした場合が最も収量上がる。これ以上枝が混む場合は、枝の間引きをする必要がある。

かん水は土の乾燥状態に応じて行なう。畑かん施設のあるところでは畦間かん水をするが、マルチの下にチューブを入れてかん水すると、株元の湿り工合がよく、よい方法である。

病害虫の防除は農薬の使用基準にしたがい、病害は発生前に、害虫は発生初期に先手防除を行なうようにする。

収穫は加工目的に叶うよう、規格に合わせて収穫する。収穫の初期および末期を除いては、毎日収穫し、過熟果が出ないように注意する。長果系は

地這で7t, 支柱で10t以上を目標にしたい。ピックル用の短果系は1個30~40gの大ききで収穫し、10a当り12~15万個の収穫がある。

肥 料

きゅうり栽培では、栄養生長と生殖生長のバランスをとることが肝要である。初期は、窒素過多で茂りすぎないようにし、中後期には、肥料不足で芯止り状にならないように注意する。このためには3成分のバランスをとり、元肥は堆肥とともに深層施肥を行ない、緩効性肥料を重点的に使用し、追肥を行なって肥切れしないようにするなどの配慮をする。

肥料の用量は収量目標を考えて決める。目安として、窒素1kg当りきゅうり300kgとふんでよからう。当場で用量試験をした成績は表二のようなものである。つまり25kg区の10tに対し、35kg区は13tで約3割の増収を示したが、45kg区では必ずし

表二 窒素用量と収量 (kg/10a)

月、旬 N用量(P.K)	6			7			8上	計
	上	中	下	上	中	下		
25kg (18. 20)	270	1,070	2,620	1,378	1,715	2,198	723	10,013
35kg (25. 30)	178	1,133	3,653	2,609	1,894	2,678	882	13,024
45kg (35. 40)	175	1,245	2,073	2,508	2,753	2,222	670	12,645

注：トンネル、支柱栽培(47年)

も増収とはなっていない。

この成績などを勘案して、支柱栽培における肥料は、表三のような設計で推進している。地這栽培は支柱栽培にくらべ、収量が劣るのが常であるので、この施肥基準から2割程度減量したものが適当であろう。

表三 支柱栽培の施肥基準 (kg/10a)

肥 料 名	全 量	元 肥	追 肥				
			1	2	3	4	5
堆 肥	2,000	2,000					
CDU化成(482)	160	100	30	30			
B M ようりん	40	40					
N K - 8 0 8	100						
苦 土 石 灰	120	120			40	30	30

最近開発されたCDUタマゴ化成は、CDU窒素の溶出や崩壊を防いで、さらに長効きをねらったものであるが、これを導入することにより、きゅうり栽培によりよい結果が期待されよう。